

2・26事件介錯人の告白

(前略)

十五名の死刑の一人であった林八郎少尉の士官学校の同級生であった進藤義彦氏が運命の介錯人として選ばれた胸中の苦悩の記録を読む機会があったので、ここに掲載してみたい。

進藤氏は、我々が幹部候補生として学んだ陸軍騎兵学校の戦車第三中隊長で、少佐であった。

平成三年になって初めて銃殺刑の実態の告白記事を発表したのである。

同級生を銃殺する立場に選ばれた苦悩の告白記事は、例え戦時中とはいえ、容易に他人に漏らす気にならず、やっと心境の変化から、実に69年を経ている。内容を紹介してみる。

処刑前夜

昭和10年に千葉県習志野騎兵第15連隊で少尉に任官したばかりの私は、翌11年7月、突如「即日、東京青山の青年会館に出頭すべし」との命令を受けた。同じ連隊からの同行者は私よりも先任の少尉3名と軍曹4名であったと記憶している。隊では出張の目的は示されなかったがおよそ軍とは馴染みの少ない「青年会館」という施設に行けとの命令に、「はて何だろう」という軽い訝りを感じたことは覚えている。

同日第一師団諸隊から青年会館に集合を命ぜられた人数は、後で考えると15名の受刑者銃殺刑の執行のため正副の射手が合計30名、ほかに指揮官要員・衛生部員など合わせて40名近くはいた筈である。我々は千葉県佐倉の歩兵第五十七連隊から派遣された陸士37期山之口甫大尉の掌握下にはいった。

ここで我々の出張の目的・任務が知らされた。2・26事件に係わる軍法会議の判決による受刑者の死刑執行が任務であって、少尉は正射手、軍曹は副射手とのことである。私は、同期の林八郎がこの事件に関与していたことは事件当時、騎兵第十五連隊連絡将校として第一師団司令部に派遣されていた折に関知していたが、この度の受刑者の中に彼がいること、しかも同期生は彼一人であることはこの会館に来て初めて判った。将校のこのたびの受刑は古来の武士の慣例に従えば切腹と見なし得る。切腹の介錯人は今回の射手なのだ。介錯人は切腹者の縁の人がこれに当たる慣わしであったと聞く。切腹者の最後を見届け、心安らかな旅立ちを見送ってやるのが介錯人の役割だとすれば、林の介錯はただ一人の同期生たる私がやるべきではないか？林は私とは予科時代に同中隊で面識もあり、運動時には負けず嫌いの二人はお互いに剣道で鎧を削ったこともある間柄で、そう親しい仲でなくとも人間的に能力的に私のひそかに敬仰する男であった。

同期の者に相談までしたことがある。「実はこんど死刑執行人の一人に選ばれたのだが、同期生林八郎を撃つことは、俺にはどうしてもできない。この命令はなんとしても辞退返上しようとおもうのだが。どうだろうか？」「馬鹿を言うな。昔から武士の切腹には介錯人がつくが、これには親友とか身近な人のあたることを本人は望んだものだ。貴様は同期生林の介錯人に選ばれたと思い、進んでその任に当たれ。林もきっと喜んでくれるはずだ。」

その秋の処刑を自ら名乗り出て志願する理由があるであろうか？黙っておればそれで済むことではないか？だが真の武士ならば彼の介錯の役を受けるべきではないか？俺は武士でありたい・・・恥かしい話ながら人間的に未熟な私は自らの進退に迷いに迷ったあげく、指揮官の大尉に心の中を打ち明けて

裁断を仰いだ。答えは「是非とも同期の君に林少尉を頼む」ということで私の考えは決まった。これは11日夜（処刑前夜）のことで、指揮官に伺いを立てるまでのあいだは偽らざるところ、「林を撃つに忍びない」という人間的な弱さと「林の最後を見届けるのは俺しかいない。俺は武士でありたい」という悲愴にもまた厳粛な使命感との相克の数時間であった。

処刑当日（7月12日）

刑執行の場所は今でも周知の如く、当時の代々木錬兵場の南端に接する衛戍刑務所の北隅である。お恥かしいことではあるが、私の気はいささか転倒していたと見えて、当日の朝食をどのように採ったか、宿舎の青年会館からどこをどう通って刑場に行ったかと言うことも当日の天候なども全く印象に残っていない。雨天でなかったことは確実である。

刑場には、刑務所の外柵のコンクリート塀を背に、白布を巻いた五基の十字架といえばキリスト教を連想するが、元来これは磔台(はりつけだい)であるが立てられてあり、その前は射撃位置よりもやや低めに地面を少し掘開して平らに地均(じなら)しがしてある。十字架の高さはほぼ座高に等しくその相互の間隔は3ないし5Mはあったであろう。十字架と射撃位置との距離は、往時の「照準監査」訓練の際の標的と小銃との隔たり(約10m)である。十字架一基に対し三八式歩兵銃一挺が照準監査台に似た架台に置かれてある。小銃は兵器廠格納の正照準の新品であると聞いた。

処刑の始まる少し前から、直ぐ隣の代々木錬兵場南端のお馴染みの俗称「なまこ山」と覚しい辺りで小銃、軽機関銃の空砲射撃が始まる。小隊程度の少部隊の攻防演習を思わせる。その手前刑務所の柵内の望楼に看守らしい人影が見える。これは刑場の指揮官となまこ山の演習部隊との間の合図を行うためのものと思われる。演習部隊の射撃は一回の処刑が完全に終了するまで続けられ、処刑時の実包の発射音と判別できない仕組みになっていたようだ。

刑場の五基の十字架の列に向かって右方向と覚しいあたりに受刑者の控え所がしつらえてあると見えて、その方向から受刑者の辞世ともいふべき雄叫びが聞こえる。「……………守れ我等が連隊旗……」などと叫ぶ声も聞こえる。第一群の5名の受刑者が刑場に連行される頃には静かになったように覚えている。受刑者の服装はその頃軍の車両部隊などに支給されていた濃いカーキ色の繋ぎの作業服の新しいのを着ており靴ははいていなかったと記憶している。きちんと折り目のついた白布で目隠しされた受刑者は両脇を二人の看守に支えられて刑場に現れ所定の十字架の前に正座する。看守が白布で受刑者の頭、両腕を十字架に縛りつけ、次いで両膝を縛り合わせる。最後に幅20センチ程の長い白布を頭部から膝に達するまで垂らし、その上から更に直径2センチの黒点を描いた鉢巻を、黒点が前頭部の中心に位置するように縛る。射手は黒点の下際を照準せよということであった。

正副の射手はいずれも架台の上の銃の照準を慎重に黒点の下際に付け架台のねじを固定して準備が完了すると、指揮官に注目して片手を挙げて無言で準備完了を報告する。各グループの恐らく最古参者であろう、「準備が終わりましたら大元帥陛下の万歳を三唱させて戴きます」と前置きして異口同音に「天皇陛下万歳」を代々木原頭の天空に響けとばかりに絶唱した。五人の正射手の目は指揮官に注がれている。この間沈黙の数秒が流れるが、指揮官の手が挙がるや射手は受刑者に対し低頭黙礼して引鉄を引く。射弾の命中した前頭部からは僅かに白布の鉢巻に鮮血がにじみ出る程度であるが、両の鼻孔からサーツと垂れ布を染めて流れ落ちる様子は痛ましい印象として終生脳裏から消えることはあるまい。次いで軍医が検診を行う。絶命が確認されなければ、正射手の左に並んで射撃準備を控えている副射手が替わっ

て再度射撃することになる事実、なかにはうめき声を出してなかなか絶命せず、ある人は副射手の撃つ二発目で、ある人はさらに正射手の三発目で事切れたのであった。痛ましい極みである。

そしてこれらの全てが終わるまでなまこ山の演習部隊の空砲射撃が続行されたが、それは空ろな印象として残っているに過ぎない。刑の執行は15名を5名ずつ3回に別けて為された。1回ごとに執行が終わると直ぐ様遺体を近くの幕舎に運んで創の処置をして納棺し、急ごしらえの祭壇に安置する。十字架の血でよごれた部分は更にも上から新しい白布を巻きつける。これらの作業はすべて医官と看守が担当する。

刑の執行に当たった我々は、任務とは言え、この手で瞬時に幽明境を異にするに至らしめた十五名の受刑者の霊前に、一同無量の感慨に咽びつつ深々と無言の礼拝を捧げて、夕刻解散してそれぞれ帰隊の途に就いた。

処刑当日の一般経過の記述を終わるに際し付言しなければならないことがある。それは当日全体の指揮に当たった山之口大尉の苦衷である。林八郎少尉の「介錯」の件はいかに苦しいとは言え林と私の個人関係であるが、大尉の立場は同期の香田大尉、一期若い安藤大尉など平素熟知の間柄である将校を含む15名全員の処刑を担当したという苦悩を味わった点は想像を絶するものだと思う。

林八郎少尉の最期

死を目前に控えて林の態度は正に冷静沈着で、挙措言語まで温厚柔和そのものであった。処刑前の控え所における、また刑場における受刑者の言動には人によってはいくらか興奮気味の言辞も聞こえたが、林には寸毫もそのような気配は感じられなかった。終始物静かで、学校時代の平素の態度そのままに看守と対応している。看守が膝を縛ろうとすると、「ほどけないようにしっかり結わえてくれネ」と優しく微笑む。林よりずっと年かきの看守が親切丁寧に縛ってくれている。5ヶ月余の刑務所での起居の間にお互いに公私に亘り何かと馴染んできたであろう二人の密やかな心情に思いを致し、瞬間胸の詰まる思いがした。些細なことであるが「縛ってくれ」と言わずに「結わえてくれネ」と言った彼の言葉が訳もなく今に至るも忘れられない。

林は私の一発の発射で事切れてくれた。介錯人の任務は終わった。射手の全員が皆任務が終了したのであるが、この任務は自己の才能を振って完遂を目指す軍務と異なり、緊張の余りロボットのように固くなって任務に服したという感じを持つのは私だけではあるまい。前夜いろいろと悩み迷いはしたものの、結局は半ば己の意思で同期生林八郎の「介錯」の役を買ってでた私は、からだの続く限り彼の供養を怠らぬことを終生の念願としている。

毎年2月26日には刑死者の慰霊祭が東京麻布十番の賢崇寺で営まれることになっている。当日はかならず参拝し、心をこめて刑死者の霊前に尺八の古典の曲を献吹しつつ密かに林の霊と語り合っているつもりである

(以上) (石井立夫氏のホームページから)